

# 傍流に生きる——菊池寛「身投げ救助業」と琵琶湖疏水——

日 比 嘉 高

## 1 土地の歴史、文学の記憶

土地をめぐる記録や歴史の残し方には、さまざまな方途がある。地誌や記念碑、歴史、地図、統計、新聞・雑誌記事といった公的な性格を持ったものもあれば、日記や記念写真、メモといった私的なものもある。その土地の歴史が呼び起こされるとき、その輪郭や濃淡、焦点は、それを記述したテキストの性格に大きく依存する。写真が喚起する歴史もあれば、統計のみが掘り起せる歴史もあるだろう。テキストが何を記録し、何を記録しないか。そしてそれに読み手がどう向き合うかによって、歴史の姿はさまざまに変わる。

文学作品の描き残したその土地の歴史というものにも、それ固有の興味深い性格があるだろう。それは必ずしも「正確な」

歴史叙述ではないかもしれないが——時には何年何月にどこで何が起こったという「事実」のレベルで不正確なことさえあるだろうが——、だからといってそれが描き出す土地の姿がまったく無価値だということにはなるまい。小説は、個人的で狭隘だが思い入れに満ちた情景を、少ないが熱心な読者に深く刻印する力をもつ一方、商品として流通し、読まれ、残るというジャンルの性質から、公的なイメージを広い範囲に創成し堆積させる能力もまた持ち合わせている。テキスト内に登場する場所が、プロットの構成の中である役割を受け持ったり、登場人物の性格づけを担っていたり、フィクション化されていることによってかえって現実との間に緊張関係を創出したりすること、小説に登場する土地描写の固有の機能かもしれない。小説テキストは、ジャンルが許容する制限のなかではあるが、虚構の

自在さを存分に利用して土地の表象を行い、他の資料たちとは異なったそれ固有の歴史を描く。ここに、文学から土地を読むことの価値と面白さがあるといつてよいだろう。

一方、逆のベクトルも忘れることはできない。土地から文学を読むという方向である。地誌、統計、新聞・雑誌記事、その他種々の性格を異にするテキスト群と、文学テキストとを交差させることによって、思いもよらない作品の読みの風景が立ち現れる。背景に退いていた土地や都市、建築、家屋などが、あたかもそれ自体、主役であるかのような複雑で生き生きとした相貌を現す。テキストのなかに、土地が息づきはじめる瞬間である。

本論は、文学テキストの分析によってしかわからない土地の風景を、また逆に、土地を読むことによって新たに浮かび上がる文学テキストの姿を、追求してみる試みである。取り上げるテキストは、菊池寛の「身投げ救助業」、土地は京都・岡崎である。菊池は第一高等学校を卒業間際で退学した後、京都帝国大学英文学科に入学し、一九一三―一六（大正二―五）年を京都で過ごしている。「身投げ救助業」はこの京都時代の経験が下地となっている短篇で、一九一六年九月に第四次『新思潮』に発表された。小説としては彼の第一作となる。

この作品を専一に取り上げた論文はほとんどなく、わずかに

片山宏行「身投げ救助業」——小説への転身——<sup>①</sup>」を数えるのみである。片山同論は菊池の戯曲から小説へという転身を、芥川との比較を行いつつ、漱石からの評価という軸を設定しながら論じたもので、作家の個人史・作品史を明らかにする上で重要な研究といえよう。また日高昭二「菊池寛を読む」（岩波書店、二〇〇三年三月）は、単独の作品論ではないが、〈心〉〈金銭〉〈共同体〉をキーワードに「身投げ救助業」を論じ、無名の個人が法や制度の介入してくる場において直面するリアルさ——立場の反転——を描いたテキストとしてこれを読解している。「身投げ救助業」は作家菊池寛の小説としての第一作となるため、注目度は比較的高い。だが、この作品をその舞台となつた土地との関連で読み解いた研究は今のところ出ていないというのが研究の現状である。<sup>②</sup>

簡単に作品のあらすじを整理しておこう。岡崎を流れる琵琶湖疏水のほとりに、ひとりの老婆が住んでいた。彼女は茶店を営むかたわら、疏水に身を投げる人々を救助し、そのことを誇りにしていた。彼女は褒賞としてもらう賞金を貯蓄し、将来の楽しみにしている。ある時、老婆の一人娘が旅役者と恋仲になり、老婆の貯金を引き出して逃げた。老婆は悲嘆し、疏水に身を投げるが、救助される。日ごろ助けた人々が自分にお礼を言わないことを不満に思っていた彼女は、そのときはじめて自分

が救助した人々の心のうちを知った。

短いながら、老婆の感情の振幅や視野の反転の様相がくつきりと描き出されている佳品と評価できるだろう。実際、これまでの作品の読解も、主人公である老婆をめぐる分析がその中心となってきた。だが、老婆の心理を焦点化しようとするテクストの語りからいったん身を引き離し、作品に描かれた京都——岡崎および琵琶湖疏水——の姿を丹念にたどつてゆくと、近代京都の景観の変貌と新しい制度の登場、そしてそれにもなう人々の経験の変化を、一風変わった視点から切り取った小説として読めてくる。

作中、次のような一節がある。

明治になつて、横村京都府知事が疏水工事を起して、琵琶湖の水を京に引いて来た。此の工事は京都の市民によき水運を具へ、よき水道を具へると共に、またよき身投げ場所を与へる事であつた。

言及されているのは、「水運」「水道」のために備えられた疏水という装置を、「身投げ場所」としていわば奪用する人々のありさまである。ここに描き出されている人々の姿は、疏水をめぐる公的な言説や、京都の近代史の中には表だつて登場しな

いものであるはずだ。

琵琶湖に発して県境の山塊をくぐり、蹴上から鴨川脇へ出て京都市内を縦断し、宇治川へ流れ落ちるこの人工の川は、この後述べるように近代における京都の再出発を直接的に担った都市基盤となるべく設計され、かつそのプロジェクトを象徴的に視覚化した新しい景観であつた。そのかたわらに、それを造成した公的時間・空間とは別種の、しかしそれと密接に絡み合った人々の時間・空間がある。「身投げ救助業」を用いながらここで読み解こうとするのは、そうした疏水端の小さな物語である。傍流に生きる——疏水の傍らに、そして近代の主流文化の脇に仮構された、もう一つの物語をすくい上げてみたい。

## 2 京都、岡崎の近代

「身投げ救助業」の物語内の時間は、次のように規定される。

老婆は第四回内国博覧会が岡崎公園に開かれた時今の場所に小さい茶店を開いた。駄菓子やみかんを売るささやかな店であつたが、相当に実入もあつたので、博覧会の建物が段々取り払はれた後もその儘で商売を続けた。「……」老婆は斯のやうにして、四十三の年から五十八の今迄に、五十

幾つかの人命を救うて居る。

これにもとづけば、作品内の時間の振幅は、博覧会開催の一八九五（明治二八）年から、作品発表の一九一六（大正五）年の間にあるどこかの一五年間<sup>α</sup>ということになるだろう。さりげなく書き込まれたこの時間設定は非常に重要である。一八九五年を起点にして始まるこの物語の時間的振幅は、まさに京都の近代を文字通り創りあげていった大規模なイベントや公共事業の数々と、歩調をそろえるかのような設定となつていることがわかるからだ。

岡崎はそもそも平安期から貴族の別荘が営まれ、また葬送の地でもあった土地だが、中世に起こった戦乱と天災で一度は荒廃していた。近世になり人々の営みが戻るものの、それは「典型的な京郊農村のひとつ」としてのそれであつたにすぎない<sup>(3)</sup>。こうした岡崎のあり方が、明治期に入り劇的に変わる。その起爆剤となつたのが、明治二〇年代から開削が進んだ琵琶湖疏水事業と、一八九五年に足並みをそろえて開催された第四回内国勧業博覧会、平安遷都千百年記念祭だつた。

東京遷都後の京都市の衰微は激しく、近世を通じて町家と公武社寺あわせて四〇余万あつた京都の人口は、一八七三、四年（明治六、七）年ごろには二二万六〇〇〇人ほどにまで激減し

ていたといふ<sup>(4)</sup>。この衰勢を立て直すべく発案された起死回生の事業が、琵琶湖疏水の建設である。北陸方面からの物資は、それまで琵琶湖を舟で運び、大津や坂本で陸揚げして、その後陸路で京都へ運んでいた。これを琵琶湖から京都まで直接水路で結ぶことにより、大量輸送を実現しようとしたのである。もともこのような計画は近世からあつたが、工事の大規模さゆえに実現されていなかった。これを第三代の府知事北垣国道が着手したのである。工事は第一期である琵琶湖から夷川船溜（岡



図1 岡崎の位置



図2 疏水南側から岡崎を見る（1893年頃）  
（『写真集成 京都百年パノラマ館』淡交社、1992年7月より）

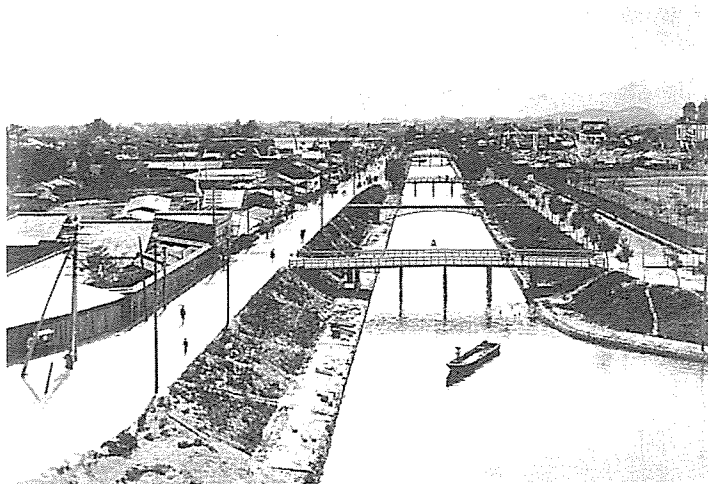


図3 東山から疏水沿いに西を望む（1895年頃。出典同前）

崎の西）までが五年の歳月をかけて完成した。さらにこの後、運河の延長が計画され明治二八年には鴨川に沿って南下し伏見を経て宇治川に至る鴨川運河が竣工、これにより大阪までの通船が可能となった。さらにこの後、水力発電の増強と水道用水の確保を図るために、第一疏水に平行する第二疏水が京都府三大事業の一環として計画され、一九二二年に完成している。当初、水運と動力利用を目的としていた疏水だが、その後飲用水と水力発電にその主たる用途が移行したとはいえ、この事業が近代京都の安定的な発展の基盤となった最大級の基幹事業であったこ

とは間違いない。

鴨川運河が完成した明治二八年には、「明治以降の京都を復興と近代化に導いた最大のイベント」ともいわれる、第四回内国勧業博覧会と平安遷都千百年記念祭が開催されている。<sup>(5)</sup> 第四回内国博は、それまで東京で開かれていた内国博がはじめて地方開催となった回であり、四月から七月までの会期中の入場者数は一一三万人を超えたという。平安遷都千百年紀年祭は内国博を京都に呼ぶ計画の途中で誘致の切り札として起案されたもので、同年一〇月、京都市の主催で開催された。

この二つの大イベントは、京都の観光都市としての志向を明確にし、そのための基盤整備——衛生事業、社寺と道路の整備、旅宿・人力車問題の矯正など——を加速させたものと捉えられている。<sup>(6)</sup> とりわけ、岡崎にまつわる点としては、京都駅から岡崎の博覧会会場を結ぶ電車（疏水の水力発電を利用した）が日本ではじめてとなる営業運転を開始し、会場付近の道路が整備計画を前倒しして造成されるなど、周辺の再開発が一気に進められたことが重要である。先に鴨川運河が二八年に完成したと述べたが、これも地域の利害対立で延期されていた工事が、博覧会を機に再開されたものだ。竣工は、会場を訪れる訪問者たちに近代京都の大事業の完成した姿を示すために急がれたものだったと考えてよいだろう。笠原論（註5）が指摘するように、

第四回の京都内国博は、それまでの東京における三回の内国博が上野という一区域でのイベントであったことに比べると、町全体の再設計、再整備をも連動させて進めようとした点において、大きくその性格を異にしていた。明治二八年の二つの祭典——内国博と記念祭——は、都市としての京都そのものを変貌させていくまさにターニングポイントに位置していたといってい

いだろう。  
疏水と内国博・遷都紀年祭によって新しい意味を与えられ、「近き頃までは田圃にて在りたる地」<sup>(7)</sup>であった岡崎の地には、この後、明治後半期を通じて、平安神宮（明治二八）、武徳殿（明治三二）、動物園（明治三六）、府立図書館（明治三二）、岡崎公園（明治三七）、市勧業館（明治四四）などといった大規模な施設や建造物が次々と建設・整備され、現代にまで引き続く、市内でも特色ある一域と化していく。まさにそこは、京都近代の「記念碑的景観に満たされている」<sup>(8)</sup>空間なのである。

### 3 菊池寛の見た岡崎・疏水

ではこの岡崎の変貌、およびその象徴的な存在である琵琶湖疏水を、菊池寛はどのように見たのだろうか。

冒頭少し触れたが、「身投げ救助業」は菊池自身の経験がヒ

ントとなっているという。菊池寛「あの頃を語る」(『現代』一九三四年一〇月)は次のように言う。

今より二十年前のことである。

京都大学文科の学生だった僕は、その頃大学の裏の方に住んでゐた。学校へは余り通わなかつたし、友達はなし、それに金もなかつたから、大抵毎晩図書館で過した。下宿を出て三高前を過ぎ、疏水の畔を通つて、岡崎公園の図書館へ行くのである。

或る冬の夜のことである。時刻も九時を過ぎてゐたから、多分その図書館からの帰りであつたかも知れない。例の如く疏水の畔に差しかかつた時、突然異様な物音と水音とを聞ゐた。驚いて駆け寄つて見ると、その近くにある茶店のお婆さんが、棒を突き出して身投げしたらしい男を助けてゐるのである。むろん、僕もそのお婆さんに、手伝つて引き上げてやつた。その時助かつたのは二十五六の若い男で、寒さに慄へてゐた。僕は自分の着てゐたネルの白い襦袢をその男に着せ掛けてやつたが、僕としては襦袢を脱いだために後で少し風邪をひきさうになつたのを覚えてゐる。身投げの理由は、何でも店の主人の金を五十円とか使ひこんだためだとか云つてゐた。〔…〕

こうした事件から『身投げ救助業』のテーマは思ひついたのであるが、あの小説の後の方は全く創作で、お婆さんが身投げ救助になれ切つて、仕事にしてゐると云ふやうなことや、娘のことなどは考へたものである。しかし、その夜身投げ救助に使つた棒は、その後ずつと茶店の後に立てかけてあつた。つまり、それは助ける用意のものらしかつた。茶店は今もあるかも知れない。そのお婆さんも或はまだ生きてゐるかも知れない。

この回顧に従えば、作品の原型になる出来事は実際に菊池自身が岡崎で体験したものであり、また作品の後半は彼の「全くの創作」であつたこともわかる。

実際、疏水では入水自殺や転落事故がたびたびあつたらしい。当時の新聞記事から、そのいくつかを紹介しておこう。

◎華族溺死す 京都在住の華族従四位子爵豊田健資氏は去る十九日親戚の家より帰宅せんとて歩行中太く酩酊したれば水を掬はんとして誤つて疏水運河に陥り終に溺死したりと云ふ  
(『読売新聞』一八九二年三月二四日)

●疏水の溺死 昨朝疏水インクライン下の舟溜に年頃二十

七八の男子溺死居れりとの報あり河原町警察署より直ちに臨検の爲め出張したる処木綿縞の衣服を着し紺の前垂を掛け職人体の男なりしが袂に中澤と彫りたる検印ありしのみにて住所氏名不明なりしかば取敢えへず上京区役所へ引渡したる由医師の鑑定にては全く誤て溺死せしものならんといふ

〔日出新聞〕一八九五年三月二八日

#### 女同士的心中

▲兩人とも都撚糸工場の工女▲義姉妹の契りを結ぶ▲姉は救かり妹の死骸は今猶不明〔…〕

河原の小石数個を兩人ハンカチに包みて携へ十一時過川端通を辿り〱疏水運河にて投身せんものと身を進む内何時しか昨朝一時半頃川端孫橋上る仁王門通開門分水路の辺りに来懸りしが恰かも通行人のなきを幸に兩人は愈々此所を死に場所と定め〔…〕

〔京都日出新聞〕一九〇九年七月二八日

事故と心中の記事だが、新しく開削された人工の川が、人々の生活の空間のなかで生、き、ら、れ、て、い、く——この場合、その方向が生とは逆の方向になってしまっているわけだが——ありさまが、かいま見えてくるだろう。

もちろん、実際にあつた出来事や習慣を下敷きになっているものの、「身投げ救助業」には基本的な事実の誤認もしくは仮構もまた含まれていたことは指摘しておくべきだろう。たとえば、「横村京都府知事が疏水工事を起して」とあるが、これは横村正直（第二代府知事）ではなく北垣国道（第三代）が正しいし、「京都にはよい身投げ場所がなかった」「自殺するものは大抵疏水に身を投げた」「多い時には百名を超した」とあるが、「（京都）日出新聞」「読売新聞」などを見ていけば、入水自殺の場所は井戸、二条城の堀、淀川筋、琵琶湖など、ほかにも複数確認できる。あらためて指摘するまでもないだろうが、「身投げ救助業」は事実もしくは歴史の忠実な再現をめざして書かれているわけではないのだ。

ただし改めて確認すれば、本論が注目しようとしているのは、こうした菊池個人の経験や些末な誤記ではなく、「身投げ救助業」というテキストが見せた鋭い洞察の部分である。

明治になつて、横村京都府知事が疏水工事を起して、琵琶湖の水を京に引いて来た。此の工事は京都の市民によき水運を具へ、よき水道を具へると共に、またよき身投げ場所を与へる事であつた。





図4 老婆の家の位置 (地図は1915年のもの<sup>(9)</sup>)

疏水工事を始めた府知事の名前は誤っているものの、作品はたしかに岡崎と疏水の歴史を背景としてふまえている。それは前節で確認したように、大がかりで華やいだ近代京都の公の歴史であり、オモテの景観である。

ところが、作品において菊池が前景としたのは、そうした岡崎と疏水の公的な歴史ではなく、その横に伏流した、名も無き人々の歴史、あるべき方法とは異なる仕方、疏水を利用し始めた人々の歴史だった。本論が注目したいのは、疏水を思わぬ角度から切り取る、この視点である。それはまさに、近代の象徴を利用して自死するという意味において、京都近代のウラ側の風景である。人々の生活に利便をもたらす真新しい装置、現代を生きる証左ともいべき輝かしいその景観に向けて我が身を投げる。そのとき投身者にと

っては、電力と飲用水を給する疏水の流れは、単なる暗流にすぎまい。疏水をめぐって織りなされる人々の光と影を、テキストは浮き彫りにする。

この観点からすれば、老婆の本業である茶店の位置も面白いところに設定されているといえる。「第四回内国博覧会が岡崎公園に開かれた時今の場所に小さい茶店を開いた」というその場所は、「武徳殿のつい近くにある淋しい木造の橋」の「四五間位の下流」に位置しているという。それはまさに、設計しつくされた広大な人工空間の裏脇に、寄生するように張り付いた場所であり、蹴上から降り下った水流が岡崎からまさに離れていこうとするその境界に位置している。

「身投げ救助業」は、京都近代の記念碑的景観の裏側で生じた出来事をあつかい、公的な意図、公的な設計にはおさまりきらず、それを予想もつかないあり方で利用してしまう、人々の振る舞いを描きとった作品なのである。

#### 4 もう一つの伏流——金銭をめぐって

だが、テキストが張りめぐらした岡崎の変貌と人々の経験にまつわる物語の網の目は、それだけにとどまらない。老婆のなりわいは茶店であるが、副業として〈身投げ救助業〉を行って

いる。自殺者を一名救うのにつき、褒状と一円五〇銭の褒賞金が与えられる。これが彼女の家計に、余剰の収入を与えている。この褒賞金に関して、テキストを読解するもう一つの要素が浮上する。金銭である。

その時の一円五十銭は老婆には大金であつた。彼女はよくよく考へた末、その頃やや盛んになりかけた郵便貯金に預け入れた。

「貯金」は近代になつて登場した制度である。明治政府は銀行および郵便局という社会基盤を整備していくとともに、「貯金」という発想と手段を人々の間に広めていく。政府にとつては国富の増大と経済の安定というメリットがあつたためである。しかも、郵便貯金にはさらに加えて、低所得者層の生活を安定化し、社会的なコントロールを効きやすくするというもうくろみも期待されていた。経済問題に造詣の深かつた衆議院議員井上角五郎は、著書『貯蓄奨励の方法』（井上角五郎・発行、一九〇二年一〇月、三頁）において、次のように述べている。

郵便貯金の各国に採用せられたる所以は経済上、自存に堪えざる貧民と雖も其精力の許す限りに於て少額を恥づるこ

となく取得の幾分づゝを容易に貯蓄し得るに至らんことを期するに在り。而して一旦貯金の効能を了得するものは或は自信の念に駆られ、或は自立の望に励まされ、多少の艱難に遭遇するも克く勇を鼓舞して其の苦に堪えんと努むるなるべく貯蓄を継続するの久しきに及んでは漸次に生活の状態を進むることを得るなり。

もちろん、「身投げ救助業」の老婆の、わずかな収入を大切に郵便貯金に預け入れるという行為は、こうした井上が述べるような国策的意図とは直接の關係はない。しかしながら、一見まつたくの個人的な行為であるかのように見える彼女の貯金の背後には、国家的な——あるいは国策的な（装置）が控えているというこの構図は、実はこの後の作品の展開およびその読解とも深く関わるのである。

井上の論説が述べるように、貯金の増大は貯蓄者の「自立」を促進するとされているわけだが、注目したいのはこれはたんに蓄積される金額の量を問題にしているようにみえるが、それとともに金銭にまつわる（時間）のコントロールを含んでいるという点が重要である。このことを、よりはつきり述べた同時期の資料を引用する。

貯蓄には必ず未来の観念なかるべからず、此観念は貯蓄の根本的観念なり、労働者が其賃金の一部を貯蓄するは、現在の快楽を犠牲に供して、以て未来の安寧幸福を得んが為に外ならず、手工者が好良なる器具を購求せんが為に、其金員を貯蓄するは、将来其器具に由つて以て人力を節約し、又は製品を好良にする希望あるが為なり〔…〕是等は皆未来に於て安寧幸福を望む観念の旺盛なるに基く

（岡崎遠光『貯蓄要論』経済書店、一九〇一年一〇月、一〇頁）

「貯金」とは、金銭だけに關わる操作ではない。それは同時に、現在の節制を担保に未来の実りを手にするという、〈時間〉を操作する行為である。それは銀行貯金や郵便貯金という社会基盤によって支えられているという意味において、そしてその基盤が人々の生のありようを意識的、無意識的に規定していくという意味において、まさに時間の制御を行う近代の〈制度〉なのだ。

では、この金銭と時間にまつわる操作を、作品はどのように織り込んでいるだろうか。

老婆の貯金行為に注目すると、テキストには、方向においても規模においてもまったく異なる二種類のお金が存在していることに気づかされる。一つは〈貯蓄〉の方向性である。老婆の

賞金一円五〇銭は、「五十幾つかの人命を救」った結果として「三百幾円」にまで上っている。もう一つは、〈濫費〉である。疏水総工事費二五万円、遷都記念祭への寄付金は三〇万円である。一方は長期間をかけて積もり積もる、個人の零細な貯金。もう一つは開発と一時的イベント（「祭」）のために一度に投下される莫大な資金。「身投げ救助業」のなかには、こうした二種類のお金が存在する。

そしてこの金銭の対比は、時間の対比へと拡張することができる。「老婆は遠縁の親類の二男が、徴兵から帰つたら、養子に貰つて貯金の三百幾円を資本<sup>もとで</sup>として店を大きくする筈であつた。之が老婆の望みであり楽しみであつた」。老婆は、現在ではなく、養子を迎え店を発展させる未来にかけている。一方、岡崎を急変させた近代のテクノロジーはどのような時間を作り出すのか。水運、電車敷設、道路整備などという新しくこの地に整備された交通機関は、移動時間を短縮し、現在に余剰の時間を産み出そうとするものである。現在を節約し未来に賭けるか、現在の余剰にこそ価値を見いだすか。金銭の対比は、こうした時間の対比とも対になっている。

さて、「身投げ救助業」はこうした二つの対比を準備した上で、貯金の盗難という老婆の悲劇を語り出すのだ。

今年の春になつて、老婆の十数年来の平静な生活を、一つの危機が襲つた。夫は二十一になる娘の身の上からである。娘はやや下品な顔立ちではあつたが、色白で愛嬌があつた。

老婆は遠縁の親類の二男が、徴兵から帰つたら、養子に貰つて貯金の三百幾円を資本として店を大きくする筈であつた。之が老婆の望みであり樂しみであつた。

処が、娘は母の望みを見事に裏切つてしまつた。彼女は「……」嵐扇太郎と云ふ旅役者とありふれた關係に陥ちて居た。扇太郎は巧みに娘を唆<sup>そそ</sup>かし、母の貯金の通帳<sup>かひぢやう</sup>を持ち出させて、郵便局から金を引き出し、娘を連れたまま何処ともなく逃げてしまつたのである。

「三百幾円」は庶民としては意外なほどの高額とはいへ、岡崎の開発費と比べれば取るに足らない。その目眩<sup>めくら</sup>がするほどの落差の中に置いてみると、老婆の悲劇はひときわ際だつた。

しかも、それが貨幣である以上、実際には老婆の金と岡崎開発の金には隔てがないともいえる。老婆の貯金は、岡崎の近代化の果実として彼女にもたらされた。一方、彼女の貯金は為替貯金局から大蔵省へと預託され、国家予算として運用される。彼女の郵便貯金は戦費となつてもしかしたら例の遠縁の兵士に

届いたかもしれないし、日本銀行から民間銀行へと融資され、新たな京都開発に使われているかもしれない。

彼女の貯金と未来は消え失せたが、貨幣そのものは環流しつづける。テクストの背後には、そうした資本の流れもまた透かし見られていたのだといえるだろう。

## 5 まとめ

テクストは金銭をめぐるもう一つの物語を紡いでいた。それはとりわけ「貯金」という近代の制度がもたらした悲劇である。老婆の「貯金」は本来彼女の未来を担保するものであつた。しかし、「貯金」という〈制度〉の中で、その預金の盗難は、彼女の未来の盗難と等価になる。「身投げ救助業」の苦さは、そうした彼女から未来がなくなつたと語らないところにある。そこにおいて、繰り延べられた未来は、到達地がなくなつたままその道程だけが残されるのである。

老婆はそれ以来淋しく、力無く暮して居る。彼女には自殺する力さへなくなつてしまつた。娘は帰りさうにもない。泥のやうに重苦しい日が続いて行く。

岡崎の景観は、ますます壮麗なものとなっていき、繰り返し文化的・政治的なイベントの会場となっていくが、老婆の日常は、もはやそのほとりだけでただ重苦しく続くだけだ。

こうした彼女の生は、あるいは彼女と同じように疏水に身を投げ、投げようとした数知れぬ者たちの生は、歴史の表舞台に決して現れることはない。「身投げ救助業」は虚構を含んではいるが、こうした疏水・岡崎という輝かしい場所においてひそやかに織りなされた〈別の歴史〉、すなわち個人によつて生きられた固有の時間、個別の歴史たちを、記述しようとしている。

加速度的に開発の速度を速めていった岡崎の地で、老婆の時間だけが疏水の端でよんだまま流れ続ける。菊池のテクストの照射した、京都近代の傍流の風景である。

## 註

- (1) 片山宏行「身投げ救助業」——小説への転身——(『文芸もず』二〇〇三年六月)、また片山『菊池寛の航跡——初期文学精神の展開——』(和泉書院、一九九七年九月)所収の「ロマンチストの変貌(二)」も「身投げ救助業」を「幻覚」から「幻滅」へという作家の転身の観点から論じている。
- (2) 河野仁昭『京都 現代文学の舞台』(京都新聞社、一九八九年九月)が、作家と作品、および舞台岡崎について簡略にまとめている。
- (3) 『史料 京都の歴史 第8巻 左京区』(平凡社、一九八五年

十一月、一〇〇頁。

(4) 『京都市の地名』(平凡社、一九七九年九月)、二二頁。

(5) 笠原一人「イベントと都市演出」(高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』昭和堂、二〇〇三年七月、所収)。

(6) 國雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』(岩田書店、二〇〇五年五月)。

(7) 「博覧会案内記(二)」(『日出新聞』一八九五年四月一日)、三面。

(8) 前掲『京都市の地名』、二三頁。

(9) 『京都の歴史8 古都の近代』別添地図(京都市史編さん所、一九八〇年七月、新装第二刷)。